日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇二四年（令和六年）四月三〇日
第一號（通巻第四五號）

八大山人「安晩帖」菊鶉図（泉屋博古館蔵）

❖目録

巻頭言
二　新年度を迎えて　大木　康
四　大慧と朱子のあいだ　中西　久味
六　日本郭沫若研究会の二十年　岩佐　昌暲
八　復旦大学「亜洲芸術、宗教与歴史研究」研修班の参加体験談　張　禧睿
十　国内学会消息（令和五年）
二〇　各種委員会報告
論文審査委員会／研究推進・国際交流委員会／将来計画特別委員会
二三　事務局より
二四　第76回大会開催のお知らせと研究発表の募集

編集◉京都大学人文科学研究所　古勝　隆一
〒606-8501　京都市左京区吉田本町
メールアドレス：gakkaidayorikyoto@gmail.com
発行◉日本中國學會
〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25　斯文会館内
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org
日本語版ホームページ：http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi

新年度を迎えて

理事長
大木　康

今年も春のおとずれとともに、日本中国学会も新たな齢を重ねることになりました。これまで長年月にわたり、先人たちの努力によって今日まで受け継がれてきた本会を、さらに将来にむけて引き継いでゆく責任の重さを感じております。本会は、会員のみなさまのお力によって支えられております。平素のご協力に感謝するとともに、これからも変わらぬご助力をお願いする次第です。

本会では、平成11年（1999）に会則を大幅に改定し、運営体制の大幅な改革を行いました。その機会に「新会則施行後、問題点の検討」を主たる任務として、将来計画特別委員会が立ち上げられました。新会則の施行からすでに20年以上が経過し、運営体制も安定した軌道に乗っているところから、各種委員会のあり方について、吾妻重二副理事長を座長として、検討していただいております。そのポイントは、特別委員会としての将来計画特別委員会を廃止するとともに、今後本会の活動をさらに活発にするにはどうすべきかについての将来計画特別委員会答申にありましたように、デジタル化推進委員会（仮称）を常置の委員会として設置することにあり、最終的には今秋の理事会、評議員会に提案させていただくつもりでおります。

昨年の大会において、金文京前理事長も再三述べておられたように、現在、中国学をめぐるデジタル環境の整備はめざましいものがあります。その結果逆に、例えば何らかのデーターベースにアクセスできるかどうかによって、論文の質に顕著な差が生ずることにもなり、研究の条件格差がどんどん広がっているようであります。

本会における研究成果その他の発信を考えても、紙媒体としての『學會報』と年二回刊行の『便り』を除けば、「研究集録」、現在試行版を公開している「会員論著目録」その他を見ても、ホームページにおいて公開しているデジタルコンテンツの比率は高くなっております。『學會報』掲載の論文も一定の期間が過ぎた後にはホームページで公開しておりますし、『便り』もホームページから読めるようになっております。

こうした事情にかんがみ、本会でも、遅ればせながら、デジタルコンテンツの作成公開、技術的援助その他、デジタル化に特化した委員会の立ち上げを検討している次第です。みなさまのご理解ご協力をお願いするとともに、どうすればこれからの世界において、十分な力を発揮できる日本中国学会でありうるか、貴重なご意見をお寄せいただければと思います。

デジタル化について思い起こせば、自分が学生であり、教師になりたてだった1980年代から1990年代のはじめごろには、まだデジタル資料は、ほとんどありませんでした。いつの時代でも、中国学に関する授業では、中国語の文献を読むことに力が注がれますが、とりわけ古典学の演習においては、語句の出典探しが、たいへんな作業でした。

そのころは、わからないことばが出てくると、まずは『佩文韻府』と諸橋『大漢和』を片っ端から引いてみたものです（『漢語大詞典』登場以前の話です）。『佩文韻府』について、われわれの時代には王雲五が開発した四角号碼検字法による索引があって、熟語の頭の文字から検索

ができたのは、すでに相当ありがたいことで、先生方の時代には、『佩文韻府』は韻字で引いたとうかがいました。そういえば、われわれの時代には四角号碼をずいぶん使ったものでしたが、最近学生さんに聞いてみたところ、四角号碼そのものを知らないようで、手書き入力があるからいらないのだとのことでした。それはさておき、『佩文韻府』では、お目当てのことばが見つかりはしたものの、その出処については「陸游詩」などとあるだけで、その「陸游詩」の語句を探し出すために、次の苦労が待っておりました。

陸游の詩集を見るためには、まず陸游の詩集がどこにあるか、探さなければなりません。わたしが勉強した東大には、中文、中哲、東洋史の研究室所蔵本のうち、原則として清朝までのいわゆる旧学に属する漢籍をひとまとめにして四部分類によって配架してある漢籍コーナーが設けられています。陸游の詩集は旧学に属するでしょうから、漢籍コーナーのどこかにはあるのでしょう。当時の漢籍コーナーには、本の管理をする助手さんがおられましたが、「本がある場所を教えないのが原則」とのことで、結局自分で蔵書目録やら『中国叢書綜録』やらを繰って、本のありかを探したわけです。

陸游の詩集といっても、これまたさまざまな種類の版本があります。いろいろある中で、どの版本が最も信頼できる版本なのか、そのことも知っている必要があります（『書目答問』のような本が編まれる理由はここにあります）。

そうして、しかるべき本にたどりついたら、後はひたすらページをめくって、問題の語句を探すよりほかはありません。当時でも作品によっては、例えば広島大学で作られた『文選索引』とか、ハーバード・イエンチンで作られた「引得（index）」シリーズなどがあり、杜甫の詩などについては、この引得があったために、どれだけ手間がはぶけたか、計り知れないものがありました。こうしたことが、いまでは「中国基本古籍庫」のようなデーターベースを使えば、一瞬にして検索できるわけですから、デジタル化の恩恵はたいへん大きいわけです。

ことは、語句の検索ばかりではありません。論文の検索や閲覧などについても、デジタル化は相当に進んでいます。論文の検索については、日本のものでも CiNii でかなり検索が可能でありますし、中国のものになると、CNKI（中国学術情報データーベース）というのがあって、論文の検索とともに、大多数の資料については、そのまま pdf で読めるようになっていて、これもたいへん便利です。

そしてさらに、世界各地の図書館において、古典籍そのものの画像の全体を公開しているものも数多く、貴重書であっても、実際北京、上海や台北、パリ、ベルリンやボストンへ行かなくても、その書影を見ることができるのです。

このように中国学をめぐるデジタル化は相当に進展しており、最近コロナによって、学校の図書館などが閉鎖されていた時にも、家のパソコンを使って、かなりの仕事ができたところにも、デジタル化の威力はあらわれておりました。デジタル化の趨勢は、これからもまちがいなく進んでゆき、もう後戻りはできないでしょう。本会としても、その流れに逆らうわけにはまいりません。

しかしながら、今から思えば、たった一つの語句を探して遠くの図書館にまで足を運び、一つの語句のために書物のページを一枚一枚めくっていったことも、決して時間の無駄であったとは思いません。漢籍コーナーに入り浸って、線装の本の手触りを確かめながら、一枚一枚ページをめくり続けていくと、次第に本そのものへの愛着がわいてきて、一種の身体感覚が身につきます。もちろん、漢籍コーナーの書棚の間を歩きまわることで、思いがけぬ本との出会いもありました。

おそらくいま五十代以上の研究者は、みな少なくとも学生時代に、このように体を使っての文献調査に時間を費やした経験があるでしょう。デジタルは便利です。しかし、要は使い方。中国学の次代を背負う若いみなさんにも、モノとしての書物に触れる機会は忘れてほしくないと老婆心（老爺心）ながら思う今日このごろです。デジタルデーターベースによって語句の検索は簡単になりましたが、その後さらに紙の本を手に取って確認する作業はおこたらないようにしたいと思うのです。

大慧と朱子のあいだ

中西　久味

南宋初頭に公案禅を大成した大慧宗杲は、仏教界のみに止まらず、一般の士大夫層にも汎く影響を及ぼした仏者である。朱子がくりひろげた仏教批判の対象は実質的には大慧禅にほかならないことも、もはや言うまでもない。私はさきに『大慧普覚禅師年譜』（以下『年譜』。『北京図書館蔵珍本年譜叢刊』第二十二冊所収南宋宝祐元年1253重刊本・『禅学典籍叢刊』第四巻所収覆宋五山版）によって大慧の生涯をたどってみたのであるが、朱子との関わりで気づいたことをいささか取りあげさせていただきたい。

まず、朱子の畏友であり、彼とともに当時東南の三賢と称された張栻・呂祖謙の二人は、もともと大慧その人ときわめて近い関係にあった。たとえ記録に残っていなくとも、彼らが大慧禅について語り合った可能性は否定できない。

張栻の父の張浚は大慧の師の圜悟に参禅していたこともあって、大慧の最大の外護者であった。大慧を臨安径山寺の住持に推挙し、彼の語録に序跋を寄せており、かつ大慧の示寂後には彼の伝記となる塔銘を著している。張浚の兄の張滉も圜悟に参じ大慧と親しくしていた。さらに、張栻の祖母の計氏は趙州無字の公案によって契悟し、大慧から印可を受けている。張栻自身については、弟の張枸とともに、七十一歳の大慧から頌を贈られたことが知られるのみであるが、張氏は一家を挙げて大慧とは懇意にしていたのであった。

呂祖謙は宋代随一の名門とされる河南の呂氏を出自とするが、呂氏は奉仏の家柄としても知られていた。彼の曾祖父の呂好問は開封天寧寺で圜悟に参禅したらしく、そのとき大慧のために奏請して紫衣と仏日の大師号を賜っている。呂好問の長子の呂本中もまた圜悟に参じ、そこで大慧と出会い、終生親しく交遊していた。呂本中は呂祖謙の大伯父にあたる。呂祖謙については、彼の書簡が『年譜』に本文とは別に附加されていて注目される。これは、隆興元年 (1163) 八月の大慧の示寂にさいして、可庵慧然に宛てて弔意を述べた書簡である。慧然は大慧の法嗣で当時径山寺に留まっていたらしい。さらに、呂祖謙はこの年の五月から二ヶ月の間、径山の大慧のもとに滞在していたとも伝えられる（『雲臥紀談』大慧寓韓駒斎）。あたかもこの年四月、呂祖謙は進士に合格し、ついで博学宏詞科にも合格して臨安に在ったはずであり、示寂直前の大慧を訪ねていたのではなかったかと推測される。

また、すでに指摘されているように、少年期の朱子の保護者であった劉子羽・劉子翬兄弟はともに大慧に参禅しており、朱子自身が禅に関心を寄せた直接のきっかけも、十五六歳の時、劉子翬のところで一人の禅僧と出会ったことであった。その僧は彼を「昭昭霊霊の禅を会得している」と評し、十九歳の頃に受けた科挙の試験では禅まがいの答案を書くまでにその僧に傾倒していたという。この話は晩年の門人である輔広によって筆録され、『朱子語類』一百四に収められてよく知られている。同じ話が形を変えて、『年譜』と合刻された『大慧語録』に附けられていたはずの尤焴撰の「大慧普覚禅師語録序」に見えている。この序文は淳祐十二年（1252）の作である。卍字蔵所収の『大慧語録』にも附けられているため従来から知られている。尤焴によれば、一僧が禅では本心を直指するのだと説くのを聞いて、朱子は「昭昭霊霊の一手を悟」

り、十八歳で科挙に赴くとき、劉子翬が彼の篋中を探ってみると、ただ『大慧語録』一帙のみが収められていたという。さらに、これは潘時挙から聞いた話であるとする。潘時挙もまた輔広と同時期の有力な門人であったから、あるいは朱子が語ったものがそれぞれ別に伝えられた可能性もあろう。ちなみに、この話には続きが考えられる。北京図書館蔵のほうの『年譜』には劉震孫による書後をも附加しているが、それには大慧が朱子に寄せた偈が記されており、さすがに事実とは思えない。ところが、そののち景定元年(1260)に劉震孫が著わした「石溪心月禅師語録序」では、朱子が李侗に入門したとき、その篋中に携えていたのは『孟子』一冊、『大慧語録』一部のみであったとしている。断定できないが、尤焴が記した話を承知していた彼は、それに尾ひれをつけたのではなかったかとも疑われる。『年譜』が重刊された理宗の時代には朱子学が公認されており、それにともなって、真偽のほどはともかくとして、朱子に大慧を結びつけようとする傾向がすでに顕著となっていたらしい。

より問題となるのは、朱子が出会った禅僧は大慧の高弟の開善道謙とされることである。この説の根拠は、朱子の門人李方子編『紫陽年譜』に収められていたはずの「李侗の羅博文宛ての書簡」(『西山読書記』三十一)とされるらしく、他に両者の交渉を示す資料も発見されている。ただし、信頼できないものも含まれる。

それとは別に、朱子と道謙の関わりについては次のような資料が傍証となろう。①乾道九年(1173)、朱子「〈答呂伯恭〉伏奉近告」(『朱文公文集』三十三)。②淳熙二年(1175)、呂祖謙『入閩録』「(四月)初四日、游密庵」(『東萊呂太史文集』十五)。③淳熙五年(1178)、朱子「〈答呂伯恭〉前日所稟密庵事」(『朱文公文集』三十四)。④淳熙六年(1179)?、呂祖謙「〈与朱侍講元晦書〉某伏蒙疏喩」(『東萊呂太史別集』八)。

いずれも道謙が住持していた密庵について述べている。朱子の住居のあった崇安県五夫里から密庵へは七里の道のりであること、道謙の示寂は淳熙二年より二十余年以前、紹興二十年(1150)前後であったこと、密庵はもと呂好問の荘園内に造営されたもので、道謙の示寂後も呂氏が管理していたこと、などが知られる。注目されるのは、①で朱子が「(今の)密庵は収入も乏しく、道謙が住持していた時のようではない」と述べていることである。朱子が道謙に言及するのはわずかにこれのみであるが、彼が住持していた頃の密庵の状況に詳しかったことを窺わせよう。道謙をしばしば訪ねていたのではなかったかと考えられる。ともあれ、朱子が仙洲山の密庵とその近辺を頻繁に訪れていたことは、かなりの数の詩文によっても明らかである。

ひるがえって道謙の足跡をざっとたどってみると、紹興八年(1138)に開悟したのち、同十年頃には、径山寺の大慧のもとを離れて郷里の建州崇安に帰ったらしく(大慧〈答富枢密・第三書〉)、同十二年頃には、呂本中や劉氏兄弟などの支援によって密庵の造営に着手していた形跡もある(『東萊詩集』十九〈謙上人清湍亭〉)。ところが一方、紹興十一年に大慧が衡州に配流になると、道謙が衡州で径山寺での大慧の語要を編纂したともされている(『雲臥紀談』謙問張浚)。この間の事情は詳らかでないが、あるいは崇安から衡州に赴いたのでもあろうか。ついで道謙はその語録を携えて張浚を訪ね序文を依頼している。それが、わが成簣堂文庫蔵五山版・西尾市岩瀬文庫蔵元版の『大慧語録』に附されて現存する張浚序であり、紹興十五年四月八日の日付がある。おそらくこの年に道謙は崇安に帰り、やがて劉子羽の求めに応じて開善寺に住持し、劉氏兄弟が相次いで没すると退去して密庵に住したのではないかと推測されるが、定かでない。

こうしてみると、朱子が道謙から禅を学んでいたのは紹興十五年頃から同二十年前後の数年間となり、また、彼が最初に手にした大慧の語録は、張浚序・道謙編の『大慧語録』であったと考えられる。現在の大正蔵第四十七巻に収められる同語録の初め四巻に相当しよう。なお、これもすでに指摘されているが、朱子もまた無字の公案に取りくんでいたらしい(前述『雲臥紀談』)。

以上、資料のみ紹介させていただいたが不明なことも多い。大慧と朱子をめぐる問題は、荒木見悟『仏教と儒教』によって提起されてよりすでに半世紀余り、今なお残された課題となっているのではあるまいか。

日本郭沫若研究会の二十年

岩佐　昌暲

郭沫若について、その業績や生き方を今日の視点から見つめなおし研究し、彼を歴史の中に正しく位置づけたい、という大言壮語を掲げ「日本郭沫若研究会」（以下「日本郭研」と略記）が成立したのは2003年２月、今から21年前のことだ。

前年11月はちょうど、この「共産主義事業のために終生奮闘した革命家で卓越した無産階級の文化戦士」（1978年６月郭沫若追悼会での鄧小平の弔辞）の生誕110周年に当たり、それを記念する「郭沫若と百年中国学術文化国際論壇」なる学会が北京で開かれた。その会議に日本から参加した、藤田梨那国士舘大助教授、武継平九州大助教授（いずれも当時）それにぼくの３人が、歓迎宴会終了後、雑談をした。その酔余の雑談の中で、日本でも郭研を作ろう、という話が生まれたのである。

北京の雑談は帰国後さっそく実現した。次はぼくたち三人の名義で発表した研究会設立と入会の「呼びかけ文」要旨（「郭沫若研究会報」創刊準備号、2002.12）である。

《文革が終わってすでに25年、郭沫若はほとんど顧みられることのない「忘れられた文学者、忘れられた歴史学者」と化しつつあるようにみえる。 だが、私たちは郭沫若の残した仕事にはまださまざまな研究の余地が残 っていると考える。同様に彼の足跡にも日本人として多くの学ぶべき点が含まれていると考える。彼は中国の現代文学者のうち、誰よりも長く日本に住み、日本人を妻とした人物である。 彼の書き残した膨大な著作と彼の生き方、考え方には、日中関係の将来像を描くとき、中国知識人を理解しようとするとき、多くの汲み取るべき知恵が含まれているであろう。だが私たちはそれをまだ十分に研究し尽くしていない。私たちはこの忘れられようとしている文学者、歴史学者を、２１世紀を生きる日本人、および日本に暮らす中国人の視点であらためて見つめなおしたいと思う。先人の研究に学びながら、郭沫若の業績を今日の視点から再評価し、きちんと腑分けし、意味づけし、彼を歴史の中に正しく位置づけたいからである。以上のような考えから、私たちは「日本郭研」を設立し、郭沫若を対象とした研究活動に取り組むこととした。》

武さんによれば、設立の呼びかけに応えて参加の返事をくれたのはごくわずかで、20人に満たなかった。余談になるが、賛同者の中で唯一「誰かがやらなければならないことをやってくれた」と激励し、原稿を下さったのが丸山昇先生だった。先生の励ましは、郭研の活動継続の支えでもあった。ここに記しておきたい。

ともあれ、こうして「日本郭研」が誕生した。03年２月16日国士館大学文学部会議室で正式の成立大会を開き、ぼくが代表、藤田梨那さんが副代表（この呼称は後の会則で会長、副会長に変更）、武継平さんが事務局長で、彼の研究室に事務局を置いた。また国士館の藤田研究室に関東支部を置いた。会の差し当たっての目標は「日本の郭沫若研究の現状を知り、研究者相互の連絡網をつくること」だった。そのためには何よりもまず、会報の発行が急がれた。これも、武さんの獅子奮迅の努力で03年５月１日に創刊号（準備号から数えて第２号）が刊行された。

こうして成立した日本郭研は、23年２月で創立20年を迎えた。丁度いい機会なので、23年６月人事を刷新し、会長を交代し、事務局も国士館大学に移した。新たに理事会を設

け、会長藤田梨那、経理担当理事横打里奈（二松学舎大非）、会報担当理事張忠仁（島根県立大教授）が就任した。小文も区切りよく20年間の郭研の歩みの紹介ということにしたい。限られた紙面のこと、箇条書き風におおよその大事のみを列ねることをお許しいただきたい。

1）会の活動の中心は会報発行

研究会を名乗っていたとは言え、当会は会員が福岡と東京（を中心とした関東地域）に偏在しており、かつ、郭沫若の専門研究者はごく少数で、研究上の基礎体力を欠いた組織だった。

紙質版最後の会報28号

そういうわけで、郭研の主体的活動は会報の発行が中心にならざるをえなかった。会報は創刊準備号（02.12）創刊号（03.5）から数えて、直近の29号（23.12）まで、30冊を出した。編集は11号（09.2）までを武さんが、12号（11.3）から28号（22.12）までを岩佐が担当した。また29号以降は、張忠仁さんが担当。それまでの紙質による冊子から、電子版に変え、会のホームページ（https://icy-saga-8795.cheap.jp/）に掲載する。

2）国際学会の開催

郭研はこれまでに2回の国際学会を主催してきた。

最初の学会は08年9月九大医学部校舎で開いた「郭沫若九大留学90周年記念郭沫若研究国際会議」だ。郭沫若が岡山の六高を卒業して九州帝大医学部に入学した1918年から丁度90周年に当たるのを記念し、「郭沫若と日本」および「郭沫若研究の現代的意義」をテーマとした。中国郭研から18名、韓国1名、日本郭研30名、計49名。非会員の中国学研究者を入れて50名を超える参加者があり、合計28の研究発表があった。二日目は大宰府、熊野川温泉などに郭沫若文学ツアー。

2回目の学会は、15年3月九州大学西新プラザで開催した「“清末民初赴日本中国留学生与中国現代文学”日中学術討論会」。これは会場使用と中国側研究者の入国の便宜のために九州大学言語文化研究院と日本現代中国学会西日本支部に共催をお願いしたが、計画・運営は全て当会が担った。参加者総数52名、中国人参加者14名。第一日目は発表討論、二日目は郭沫若福岡留学期の文学遺跡の参観と小旅行に当てた。

3）論文集・資料集の刊行

以上2回の国際会議の発表論文は、いずれも書籍にまとめて出版した。

『郭沫若の世界』 郭研最初の国際学会発表論文集

1．岩佐・藤田・武編『郭沫若の世界』花書院、10.7

2．岩佐・中里見敬・李怡編『桌子的跳舞—“清末民初赴日本中国留学生与中国現代文学”日中学術討論会論文集』上・下、台湾・花木蘭文化出版社、16.9）

3．ほかに2009年に同年度の四川省教育庁に申請した科研費「日本における郭沫若関連資料収集と研究」（申請者、岩佐、藤田、郭偉、岸田憲也）の成果、『日本郭沫若研究資料集』全18巻、別巻『日本郭沫若関連文献』1巻がある。内容は日本国内で公刊された郭沫若関連資料を収集、コピーして簡易製本しただけのもの。研究資料として10年8月四川省郭沫若研究センターに贈呈した。

4．別巻目録は、申請者を著者として国内で出版した。

『日本郭沫若関連文献総目録』明徳出版社、11.04

4）国際交流・国内学術活動

当会は、設立の当初から中国郭沫若研究会と密接な関係があった。紙幅の関係で省略するが、前述の2回の国際会議以外に、中国郭研やその研究者との交流は当会の活動の大きな柱だった。また、09年8月日中の郭研と米韓の研究者を中心に国際郭沫若学会（The International Guo Moruo Academy 略称 IGMA）が成立し、藤田梨那さんが会長に選ばれた。これにより当会の活動が大きく国際的に広がる契機を得たことも指摘しておきたい。

以上が、日本郭研創設から今日までの20年間の活動のあらましである。

なお、郭研は、郭沫若だけではなく、広く「創造社」やそれに関わる作家を対象とする研究者の参加も大いに歓迎する。関心、興味のある方はご連絡いただきたい。

復旦大学「亜洲芸術、宗教与歴史研究」研修班の参加体験談

名古屋大学大学院
張　禧睿

筆者は、2023年６月、中国上海の地に降り立った。コロナ禍の中、日本に留学に来て以来の帰国である。2023年６月23日から７月２日にかけて、復旦大学文史研究院にて開催された第十二届「亜洲芸術、宗教与歴史研究」の研修班に参加するためであった。

この研修班は、2011年に発足して以来、2020年の中止を除けば、毎年開催されているイベントである。選考に合格したアジアに関する芸術、宗教、歴史分野の博士課程の大学院生が世界各地から復旦大学に集まり、著名な学者の講義の受講、参観活動を行った上で、グループディスカッション及び研究発表をするというものである。

2023年度の研修班は、復旦大学文史研究院が主催、東京大学東洋文化研究所、ゲッティンゲン大学東アジア系、カリフォルニア大学バークレー校歴史系 LKSF Program が共催するという形で、「グローバルヒストリーの歴史」（全球史的歴史 /The History of Global History）を主題としたものであった。幸いにして、今回はコロナが収束した後に、初めてオンラインから対面参加に復活したものであった。参加者の構成は、中国大陸、香港、台湾、アジア、欧州、北米における計三十六大学に在籍する博士課程学生、五十名ほどであった。中国語ネイティブが主であるが、アメリカ、ロシア、トルコ出身の学生数人も含まれていた。国家間の自由な移動が回復しつつある中、この時代の転換点に立って、グローバルヒストリーの過去と未来を考えることには深い意義があった。

初日の開講式は、復旦大学邯鄲キャンパスの光華楼で行われ、葛兆光教授が、「全球史之前：古代中国認識『世界』的曲折歴程」をテーマとして、講演を行なった。豊富な文字記録および地図を提示しながら、古典中国の世界に対する認識の流れを整理した。まず、先秦時代～紀元１世紀、漢民族は「九州」（『尚書』禹貢）とその周辺（東夷、西戎、南蛮、北狄）を世界として認識していた。中古時期（紀元１～７世紀）に入って、漢民族の活動範囲が拡大し、また仏教がインドから伝来したことによって、中国の世界観が初めて変わった。その後、宋代、元、明代末期において、世界への認識が三度変わった。清末以降、中国の世界観は根本的な転変を迎え、グローバルヒストリーが現代の教育の舞台に登場したという。

この講演をきっかけとして、世界そのものを捉える認識が、まさしく古典中国を研究する自分の位置づけを示すものだという認識を持った。また、正史のテキスト及び篇目設置に見る通り、外部地域の情報を記す表現と姿勢が変わっている流れは、世界が何を内包しているのかを考え直す過程でもあった。例えば、自分の専門でいえば六朝隋唐期の僧侶たちによって書かれた『西国伝』『外国記』には、アジアに渡る仏教伝播に伴う国家間のひと・ものの移動を記す文脈があり、中国における世界観の拡大を反映している。

研修課程は六日間に渡り、講座と参観活動が隔日で実施された。講座は幅広い分野にわたっており、文史研究院のホームページ（https://iahs.fudan.edu.cn/info/1155/5812.htm）から課程の内容を転載する。

①李雪濤（Li Xue-tao）（北京外国語大学歴史学院教授）
全球史与跨文化研究

②夏徳明（Dominic Sachsenmaier）（ゲッティンゲン大学東アジア系教授）

全球史及其学術史的国際図景：一個発展中的領域之矛盾与前景

③胡渚清（Zhuqing Lester S. HU）（カリフォルニア大学バークレー校音楽系助理教授）

兼聴則明——帝王治術的声覚維度

④胡雋（Jun HU）（カリフォルニア大学バークレー校芸術系助理教授）

1939年左右雲岡的維也納学派：殖民考古学、柴可夫斯基和全球芸術史

⑤大木康（Oki Yasushi）（日本東京大学東洋文化研究所教授）

中国和日本的隠逸与文学

⑥陳恒（Chen Heng）（上海師範大学人文与伝播学院教授）

世界的学術史与世界史的学術

今回参加学生は史上最大人数だったため、三つのグループに分けられていた。講座の実施日の夜には、グループディスカッションが１時間半行われた。亀茲の壁画芸術、西夏時期の観音信仰、16世紀東アジアのスペイン植民地史など、異なる分野の学生が講座に対する感想を述べ、或いは関連知識を補足して、活気に溢れたものであった。ディスカッションののちは、全体会議が開かれ、講義を担当された先生に対して、質疑応答を行った。例えば、特定の器物或いは事象によって、ヨーロッパ、アジアを跨ぐ文明間の交流を線型的展開とする構想の限界など、まさに刺激に満ちた学術争鳴の雰囲気であった。

また、参観活動からも少なからぬ収穫が得られた。参観活動は、太倉博物館、徐家匯蔵書楼、上海博物館、蘇州博物館を見学し、航海、印刷、墓葬、仏像などから反映された歴史のあり方を体感できた。とくに上海博物館では、ちょうどその時期に、「玉楮留芳：上海博物館蔵宋元古籍展」、「実証中国：崧沢・良渚文明考古特展」、「何以中国：文物考古大展系列首展」が開催されていたため、貴重な仏教写経、出土品が展示されており、大勢の観覧者たちと押し合いへし合いしながら、拝見する機会に恵まれたのは得がたい経験であった。

研修の目的には、学びはもちろんであるが、大学院生同士のコミュニケーションも含まれている。これは、将来学術界を担っていく上で、未来に繋がる大切なものである。学食での食事や、参観活動のためのバス車内も、学生同士が親密に交流する場であった。自分と同じ国出身の学生であっても、海外に留学するうちに、それぞれ身に浸透している学術研究の体系の特徴を持っていた。

開講式の様子

また、多様性を持つ成員で、キャリアプラン、フィルドワークについて話し会うとき、有益なヒントがたくさんあった。ちなみに、筆者は、この研修班に参加していた台湾・アメリカの大学院生たちと中国仏教に関する新しい研究グループを立ち上げることともなった。学際的研究が重要視される趨勢の中で、文献、図像、儀式という視点から共通する接点を求める学びの過程は、刺激に満ちて魅力的であった。

他、研修班をきっかけとして、東京大学大学院の孔詩さんと葉宇軒さん、関西大学大学院の陳暁淇さんと出会い、筆者を含めた４人は、第75回日本中国学会（於大阪大学）で発表した。研修班の「中国の外から、中国を考える」というテーマの通り、「日本の外から、日本のアジア研究を考える」ことは、いままさに日本で中国学研究に従事している我々にとって有意義な体験だった。

末筆ながら、改めて研修班で講義を行われた先生方、メンターを担当された王鑫磊、白若思、尹敏志先生、事務課の先生方に深く感謝を申し上げたい。2024年度以降もこの研修班は開催予定のため、日本でアジア関連の研究を行う院生の積極的な参加を期待したい。

（写真は https://iahs.fudan.edu.cn/info/1010/5831.htm より）

国内学会消息（令和５年）

◉北海道大學中國哲學會

例會

１月27日

修士論文成果發表會

・『元秘抄』研究　長谷川健太

・戦国時代における縦横家の君臣観　韓　佳辰

３月１日

修士論文成果發表會

・『楞厳経』における諸相と易学の思想研究　常　馨月

・『易林』における神仙思想―西王母を中心に　楊　雯

４月28日

・孔子が語る隠逸　熊　征

５月26日

・曾子と「三省」と　莫　寒

・中國北朝期の姓と祖先意識　市村俊太郎

６月30日

・包山卜筮祭禱簡における「凶攻解」についての新解釈　趙　珊

・日者と貞と巫　何　松延

７月28日

・王充の「意象」観　凌　玲

10月27日

・『鬼谷子』によって考える蘇秦の論弁・遊説・説得術に関する研究―反應篇における蘇秦の術の解釈―　張　楽融

12月１日

・桃源瑞仙の易学と足利学校　近藤　浩之

北海道大學中國哲學會第五十三回大會　９月２日

・『唯女子與小人爲難養也』の解釈の変遷　白　亮

・郭店楚簡『性自命出』と孟子・荀子の性説との比較研究　王　耀瓏

・秦漢交通史の変遷から政治制度に関する研究　武　憶岩

・北朝期の喪服礼学の特徴について　市村俊太郎

・比較注釈学は可能か？―ヘンダーソン著《聖典、正典、そして注釈：儒教と西洋の釈義の比較》を手がかりに　水上　雅晴

・海昏侯劉賀墓出土「孔子衣鏡」の「孔子伝記」について　小幡　敏行

（何　松延・莫　寒　記）

◉北海道大學中國語・中國文學談話會

談話会

第266回　１月18日

・『婦女雑誌』成長期と女性像についての考察　趙　海涵

第267回　１月25日

・自然神「署」を祭る儀式におけるトンパ畫　李　依蕊

・『金瓶梅詞話』における「澡牝」について　陳　惠陽

第268回　２月15日

・ウイグル地域から全國へ―新中國 (1949 ～) におけるエペンディ（阿凡提）の話の變遷　胡　宋語嫣

・穆儒丐の小説『梅蘭芳』に描かれた男旦についての考察　陳　亦瑶

第269回　２月22日

・道は屎溺にあり：『金瓶梅』における便器と用便　姚　依平

・彝族撒尼人の阿詩瑪をみんなの阿詩瑪へ―1954 年と 1964 年、『阿詩瑪』の主旨の變遷　呉　越

・『金瓶梅詞話』における「雪」の存在　熊　征

・清代における清雅詞の受容について―姜白石の詠物詞「斉天樂」をめぐって　張　江林

第270回　９月14日

・黒い勇者はなぜ黒いのか？　上原　究一

刊行物

『火輪』第44號（３月）

『饕餮』第30號（９月）

（藤井　得弘　記）

◉秋田中国学会

春季第174回例会　11月25日　於秋田大学

・満洲国の女性作家・梅娘の日本経験
　—童話創作を中心に　羽田　朝子
・荀子の「天を大として之を思ふは物として蓄ひて之を制するにいずれぞ」の思想—存在と価値の弁別および関与という弁証法—　吉永慎二郎

（羽田　朝子　記）

◉東北中国学会

第71回大会 5月28日 於東北大学（中国思想・中国文学分野のみ抜粋）

・『韓詩外伝』における『荀子』の利用
　—引用詩句に着目して—　岡本　光平
・劉炫『論語述議』小攷
　—兼ねて『論語』鄭玄注の盛衰を論じる—　王孫　涵之
・追憶の文学—温庭筠の友を想う詩—　鈴木　政光
・羅近溪における孝悌慈に基づく格物説について　潘　虹智
・『黄帝内経』諸注釈における医徳　浦山　きか

（齋藤　智寛　記）

◉東北シナ学会（中国思想・中国文学分野のみ抜粋）

二月例会　2月21日

［卒業論文発表会］

・阮籍の「詠懐詩」八十二首について　氏家　彦斗
・葛洪の神仙思想　山口みなみ
・清浄法行経について　柳澤　瑞希
・洞山良价研究　佐久間泰晟
・聊斎志異における女性同士の親密な関係について　根本　侑実
・役割語から見る中国語漫画作品の人物描写研究　打田南菜果

［修士論文発表会］

・『韓詩外伝』における引詩
　—『荀子』の引用文を中心に—　岡本　光平

（高橋　亨・菅原　尚樹　記）

◉東北大学中国哲学読書会

第209回　3月23日

［講演会］

・宋代士大夫の学術と筆記　田中　正樹

第210回　10月26日

［卒業論文構想発表会］

・『老子想爾注』の思想　張　暁迪
・白居易の作品に見える仏教思想　兪　飛

（高橋　亨　記）

◉筑波中国学会

研究発表会　オンライン開催

2月10日

・曹植の「棄婦詩」における女性像とその象徴的意味　王　馨甜

4月14日

・司空曙詩における「嘆老」
　—「早春遊望」に着目して　福原　早希

4月28日

・「干将莫邪」という物語について各本の比較　欧陽　懐蒙

7月7日

・曹丕の詩における悲しみの内容と表現について　王　馨甜

（稀代麻也子　記）

◉中国文化学会

大会　6月25日　於文教大学

［研究発表］

・董其昌『画禅室随筆』の成立について　尾川　明穂
・“ 檻 ” について　村上　之伸
・眇眼的漢文教育論—ことばへの関心を育む漢文教育を目指して—　坂口　三樹
・明治天皇の行宮所に関わる埼玉県師範学校に関わる石碑について　薄井　俊二
・引用句をどう採るか
　—その範囲を決めるもの—　高橋　均

［シンポジウム］

・新科目「言語文化」とこれからの漢文教育―対話的で主体的な学びの進展のために―　三上　英司・木村　淳・宇賀神秀一・佐藤　由惟・松村　茂樹

刊行物

『中国文化―研究と教育―』第81号（６月）

（内山　直樹　記）

◉お茶の水女子大学中国文学会

大会　４月22日　オンライン開催

・江戸末期における漢籍の流転：『竹友集』を例として　富　嘉吟

・中国語の語気副詞〝可〟の意味論　伊藤さとみ

７月例会　７月１日　オンライン開催

・現代中国における「シスターフッド」の形成―「女子書店」の活動を手かがりに　魏　晨

９月例会　９月２日　オンライン開催

・隠蔵与表現：廃名小説中的文体価値　王　小環

・中島敦の近代中国への関心における家族の影響　閻　瑜

12月例会　12月２日　オンライン開催

・『急就篇』と『千字文』とのつながりについて―北魏における受容と継承、南朝梁における刷新―　泰田利栄子

（竹野　洋子　記）

◉六朝学術学会

第27回大会（創立25周年記念大会）　９月９日　東京大学（ハイブリッド形式）

［報告］

・劉知幾の駢儷文批判について　名越　健人

・任昉の詩文と『述異記』―「事」の観点からの一考察　郭　姣

・陶淵明「擬古」詩其一を巡って　宇賀神秀一

・江淹詩賦における悼亡と神女との関わりについて　西川　ゆみ

・六朝期の詩題における「寄」字の用法の成立について　住谷　孝之

〇創立二十五周年記念企画

一、興膳先生の略歴ご紹介　安藤　信廣

二、記念企画―興膳宏先生の世界をふりかえる

・『亂世を生きる詩人たち　六朝詩人論』に学ぶ六朝文学研究の可能性と課題　佐藤　大志

・文学と儒教―『中国の文学理論』『中国文学理論の展開』を読み直す　渡邉　義浩

・「創作技法論の展開―『文心雕龍』から『文鏡秘府論』へ」から二つの＜流れ＞を見る　道坂　昭廣

第44回研究例会　３月４日　於國學院大學（ハイブリッド形式）

［報告］

・語りの表現から見た梁簡文帝蕭綱の詩風―「新成安樂宮」を中心に　大村　和人

・孫呉の対魏晋前線における都督区について―軍事戦略との関係を中心に―　潘　宗悟

刊行物

『六朝学術学会報』第24集（３月）

（山崎　藍　記）

◉日本杜甫学会

第７回大会　９月２日　北海道教育大学旭川校（オンライン併用）

［研究発表］

・李白の閨情詩―閨情・閨怨の百花開く　下定　雅弘

・杜甫詩対偶素の提唱　水谷　誠

［シンポジウム］

杜甫の散文について考える―杜甫文学の全体像を明らかにするために―

・杜甫散文研究の意義　谷口　匡

・杜甫「為華州郭使君進滅残寇形勢図状」について　高橋　未来

・文・詩題・詩序から見る杜甫散文の特徴　荒井　礼

刊行物

『杜甫研究年報』第６号（３月）

（紺野　達也　記）

◉中唐文学会

大会　10月６日　大阪公立大学

［研究発表］

・貞元年間の中和節詩会をめぐる考察　李　恒

・盛唐の響き―張祜の詩における音楽　劉　孟磊

［講演］

・白居易の閨怨詩―杜甫からの継承と発展　下定　雅弘

・中唐の詩賦と韻書　平田　昌司

刊行物

『中唐文学会報』第30号（10月）

（高橋　未来　記）

◉日本宋代文学学会

第10回大会　５月20日　於早稲田大学

［研究発表］

・転生する僧侶―蘇軾「僧圓澤傳」考―　加納留美子

・村瀬栲亭編『増続陸放翁詩選』について　甲斐　雄一

・宋代の捕蝗詩　高橋　幸吉

・試析周邦彦《清真詞》的起與結

―以民國詞人喬大壯、唐圭璋之説為例　卓　清芬

第２回宋代書簡シンポジウム

JSPS 科研費基盤 (B)「宋代書簡に関する総合的研究」主催／日本宋代文学学会共催

・歐陽脩「啓」文体の特色―歐陽脩四六文と『文選』四六文との比較―　東　英寿・久保山哲二

・宋代の「啓」の効用

―劉克荘の文集を手掛かりとして―　平田　茂樹

・唐・五代の「書儀」と宋代の書簡

―継承と変容をめぐって―　永田　知之

・総合討論

刊行物

『日本宋代文学学会報』第十集

（奥野新太郎　記）

◉日本聞一多学会

第26回大会　10月28日　於二松学舎大学

［研究発表］

・草森紳一による聞一多詩の翻訳　鄧　捷

・周作人と日本文人たちとの交流

―三回の日本再訪を中心として―　呉　紅華

・朱自清『詩言志辨考』

―詩における「比興」とは―　牧角　悦子

刊行物

『神話と詩』第20号（３月）

（横打　理奈　記）

◉日本漢詩文学会

https://nihonkanshibun.jimdofree.com/

第17回例会　３月４日　於共立女子大学

・オープニング演奏（弦楽アンサンブル）　メンデルスゾーン　弦楽のための交響曲第九番ハ長調〈スイス〉より第三楽章　アンサンブル凛

・若き天才メンデルスゾーンの魅力―指揮者と奏者の視点　アンサンブル凛

・郭沫若「カルメラ娘」研究　張　琢月

・『論語』章句に見られる虚字のはたらきについて　宇野　直人

・山田原欽と「萩八景」

―瀟湘八景をいかに見立てたか　鎌田　出

刊行物

『朱子絶句全訳注』第６冊（汲古書院、11月）

（松野　敏之　記）

◉日本詞曲學會

詞籍「提要」譯注検討會

９月２日、３日　於中京大学（オンライン併用）

『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および検討

『唐宋名家詞選』譯注検討會

３月11日、12日　オンライン開催

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

小風絮會（『唐宋名家詞選』譯注）

１月28日、５月13日、７月１日、10月28日、12月９日

於立命館大學（オンライン併用）

龍楡生編『唐宋名家詞選』の譯注および檢討

刊行物

『風絮』第20號（12月）

（藤原　祐子　記）

◉國學院大學中國學會

第224回例会　１月７日　オンライン開催

・楚辭「離騷」に於ける「天」の言説
　—その諸相と特徴と　木村　剛大
・楚辞「天問」の変容について　石本　道明

第225回例会　10月21日　ハイブリッド開催

・楚辭における「守」について
　—「九辯」を端緒として—　井上　黎
・柳宗元の「諸子弁」について　名越　健人

第225回例会終了後、研究会成果報告（ハイブリッド開催）

第66回大会・総会　10月22日　ハイブリッド開催

［公開講演］

・朱子学再考—「分」の思想をめぐって　吾妻　重二

［研究発表］

・楚辭「離騷」に於ける「前」について　木村　剛大
・『文心雕龍』「詮賦篇」について　鈴木　崇義
・宋代士人の青詞制作　戴　琳琳
・一行阿闍梨の天文と呪術　田中　文雄
・神虎召魂法における壇と呪法
　—南宋期の道教儀礼から—　浅野　春二

研究会

・唐代文学研究会（毎週火曜日、毎月土曜日、対面）
　—『宣室志』・『唐詩解頤』の読解　澤﨑　久和
・中国哲学史研究会（毎週木曜日、対面）
　—『初学知要』の読解　青木　洋司
・中国現代文学研究会（毎週火曜日、対面）
　—謝冰心《再寄小読者》の読解　牧野　格子
・中国礼俗文化研究会（毎週金曜日、対面・オンライン併用）—『老子想爾注』の読解　浅野　春二

中國學會奨励章表彰　２月25日

［卒業論文］

・『近思録』における「致知」　田中　千晴

刊行物

『國學院中國學會報』第68輯

『崑崙』第235号～第237号

（鈴木　崇義　記）

◉早稲田大学東洋哲学会

第40回大会　６月10日　於早稲田大学

［研究発表］

・『宝性論』における謗法について
　—第五章第二十偈の変容から見て—　蒋　天任
・平安後期における謗法者の往生をめぐる議論—『浄土厳飾抄』と『決定往生集』を中心に—　松尾　善匠
・十八世紀日本の「正名」
　—朱子学者を中心に—　清水　則夫
・『玄義覚要鈔』所収の論義について　松本　知己
・六朝道教における火錬　広瀬　直記

［講演］

・普渡と錬度　松本　浩一

刊行物

『東洋の思想と宗教』第40号（３月）

（武本宗一郎　記）

◉早稲田大学中国文学会

第48回春季大会　６月24日　ハイフレックス開催

［研究発表］

・婚活アカウントにみる中国サブカルチャー愛好者のアイデンティティー変容について—@拯救大龄二次元の投稿を中心に　王　雅俊
・友野霞舟の填詞について　陳　竺慧

［講演会］

・文学、サブカルチャー、アフターコロナ—2000年代以降の中国における文化と政治　楊　駿驍

第48回秋季大会　12月２日　ハイフレックス開催

［研究発表］

・南宋士大夫の「境界」意識：陸游詩文をめぐる小考　潘　仕奇

・CFL における「外国語不安」
　―教室内不安を中心に　楊　寗

［講演会］

・陶詩解読のいくつかのポイント　井上　一之

刊行物

『中国文学研究』第49期（12月）

（学会ホームページより）

◉慶應義塾中国文学会

http://www.keiochina.jp/top5-chugokugakkai.html

第８回大会　７月１日　オンライン開催

・「河南地域における全真教「太古棲雲門下」について」　脇山　豪

・「ラジオ番組表からみた在満日本人の文化生活
　―関東庁時代の大連放送局を中心に」　代　珂

・「清代の童養媳について
　―知識人家庭を中心に―」　五味　知子

・「岡晴夫先生の著作の刊行について」　岡晴夫先生著作編集委員会

［講演］

・「中国古典籍の序跋について
　―汲古閣本十三経注疏序―」　高橋　智

刊行物

『慶應義塾中国文学会報』第八号　2024年３月

（須山　哲治　記）

◉名古屋大学中国哲学研究会

第99回名古屋大学中国哲学研究会　７月26日

・中井履軒の覇者観―『左伝逢原』と『孟子逢原』とを中心に―　荒川　兼汰

・荻生徂徠における『荀子』解釈と評価　堀尾　裕真

刊行物

『名古屋大学中国哲学論集』第22号（５月）

（佐野　大介　記）

◉京都大学中国文学会

第38回例会　７月８日　於京都大学（オンライン併用）

・中国古典詩文における「猿鳴」―山の奥から文人の世界へ　金　鑫

・元稹の詩風―杜甫の継承　好川　聡

・「遊石門詩序」と、遊覧詩序の系譜と「遊天台山賦」　佐竹　保子

・小川先生が授業で配布されたプリント　下定　雅弘

刊行物

『中国文学報』第96冊（2022年10月）

（緑川　英樹　記）

◉中國藝文研究會

○合評會及び研究會

合評會　４月23日　立命館大学・オンライン開催

研究會　７月15日　立命館大学・オンライン開催

・漢代の尸解仙のあり方　許　曉璐

・「桃花源記」中の理想郷の所在
　―洞天思想との結びつき　唐　鈺

・毛維瞻の生涯について　鄭　玲玉

・高橋玉蕉の社交詩について　詹　斐雯

研究會　９月24日　立命館大学・オンライン開催

・《宗周鐘（㝬鐘）》再考　高島　敏夫

・高橋玉蕉の詠物詩と江戸後期女性文人の風雅な日常情景　詹　斐雯

合評會・研究會　12月２日　立命館大学・オンライン開催

・『説文解字』部首の配列について―字形に基づいての部首接続の三つの階層とそれぞれの表現　陳　銘

刊行物

『學林』第76號（６月）

『學林』第77號（12月）

（宮本　紗代　記）

◉東山之會

研究発表　於京都女子大学（オンライン併用）

２月18日

・岑参の辺塞前と辺塞詩　黒瀬加那子

３月25日

・賈島『長江集』と重出詩について　愛甲　弘志

４月15日

・日本漢詩を添削する
　―中国文人のプライド―　蔡　毅

６月24日

・中国の仏教文学文献とその研究について　髙井　龍

７月８日

・我對清代李商隱詩接受的一點淺見　李　宜學

９月30日

・科挙文学の再検討　谷口　高志

11月11日

・小説の担い手―落第書生の文学　赤井　益久

12月16日

・唐代小説訳注雑感　澤崎　久和

『長江集』譯註　２月18日～12月16日

巻四「早春題友人湖上新居二首」至巻五「題章博士新居」

（加藤　聰　記）

◉阪神中哲談話会

第406回例会　12月16日　於関西大学（共催：立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所漢字学研究会／科研基盤Ｂ東アジア漢字文化圏の疾病・疫病観の史的・現代的展開：鬼系病因論の起源と思想的水脈）

［講演］

・鬼による病気とその治療
　―日本中世を中心として―　小山　聡子

［評書］

・佐藤信弥『戦争の中国古代史』　下田　誠

・橋本敬司『人間性とは何か―中國思想のダイナミズム―』について　工藤　卓司

［呉昌碩生誕180年記念企画］

・王家誠『呉昌碩伝』について　村上　幸造

・西泠印社120周年社慶大会参加報告　藤井　郁子

・「生誕180年記念　呉昌碩の世界―海上派と西泠名家―展」について　柏木　知子

（橋本　昭典　記）

◉大阪大学中国学会

刊行物

『中国研究集刊』第69号〔湯浅邦弘教授退休記念号〕（３月）

電子版 https://www.chugoku-kenkyu-shukan.org/

（草野　友子　記）

◉懐徳堂研究会

https://www.kaitokudo-kenkyukai.org/

第34回研究会　６月17日　四天王寺大学あべのハルカスサテライトキャンパス（オンライン併用）

・浅見絅斎『楚辞師説』初探　矢羽野隆男

・懐徳堂学派の『論語』首章解釈
　―「時に之れを習ふ」の理解―　黒田　秀教

・江戸時代の『荘子』研究の評価
　―中井履軒撰『荘子雕題』を題材に―　藤居　岳人

・「白虹貫日」と西村天囚　湯浅　邦弘

・鉄砲伝来紀功碑文の成立と『碩園文稿』　竹田　健二

第35回研究会　９月10日　四天王寺大学あべのハルカスサテライトキャンパス（オンライン併用）

・中井竹山の西岡行　寺門日出男

・西村天囚『論語集釈』における引用所説と清朝学術　矢羽野隆男

・中井履軒『通語』諸注釈書小考―その特色と漢文教材としての可能性について―　久米　裕子

（竹田　健二　記）

◉中国出土文献研究会

http://www.shutudo.org/

第76回研究会　11月17日（オンライン開催）

・香港浸会大学訪問報告　中村　未来

・北京大学蔵秦簡『禹九策』の基本情報概説　六車　楓

（草野　友子　記）

◉広島大学中国思想文化学研究室研究会

第216回研究会　２月14日

［卒業論文発表会］

・唐・宋における麻姑
　―唐詩・宋詩詞を中心として―　榎本　恵
・塩鉄論の研究　大賀　史也
・『抱朴子』外篇行品篇における「神」　千鶴　恵史
・荀子の政治的思想について　高森　海貴
・劉宝楠『論語正義』研究　西本　尚太
・神仙化のメカニズム　森本　聖洋

第217回研究会　11月14日

［卒修論文中間発表会］

［卒論］

・身体論からみる鉱物系薬物の成立　荒木　遙
・時代に伴う龍の扱いの変遷　澤井　智広
・山海経にみられる鳥　清水　堅登
・異常出生譚がもつ意味について
　―母胎が禁忌を犯した場合を中心に―　鈴木　花
・冥界の使者とその文化的背景について　山本　智惠

［修論］

・儒教思想の武士道への影響
　―山鹿素行を中心に―　鄭　思玟

第218回研究会　12月５日

［卒業論文テーマ発表会］

・僧肇の般若空義　井野　梨菜
・『太平広記』精怪に見る文化　田町　貞介
・婚礼における礼物の象徴　鳥取　美歩

刊行物（発行人 東洋古典學研究會）

『東洋古典學研究』第55集（５月）

『東洋古典學研究』第56集（10月）

（有馬　卓也　記）

◉広島大学中国文学研究室研究会

第237回　１月26日

［修士論文最終発表］

・『拍案驚奇：地底旅行』と『地底旅行』の創作背景について　劉　宗源

第238回　２月10日

［卒業論文最終発表］

・『太平広記』畜獣部以外の部に収録される犬説話について　金子　由佳
・『封神演義』における紂王と武王の対比関係　藤原　朋夏
・『聊斎志異』の「酒友」に見られる男性愛的要素　村本　学
・『十八史略字引』の需要層　苅米　龍
・『塵冢』の作成時間と「語彙」の漢語　平山　眞衣
・『故事新編』「鋳剣」のモチーフとしての「干将莫邪」説話　大橋　侑悟

第239回　６月29日

［修士論文中間発表］

・『太平広記』神部の説話内容について
　―神一から神六を中心に―　董　芸星
・『閑情偶寄』の凡例七則について　李　心怡

［修士論文構想発表］

・元稹詩研究―白楽天詩への和作を中心に―　蔡　若琪
・李賀詩研究―李賀の「空光」について―　林　書卉

第240回　７月27日

［修士論文最終発表］

・「二拍」の男性描写
　―人間悪の深掘りによる勧善懲悪―　陳　傑爽
・「異史氏曰」と後世の批評について　黄　舒銘

［卒業論文構想発表］

・『捜神記』研究　吉本　穂波
・『水滸伝』評点本五種における宋江評について
　―第十八回を中心に―　北村　紘大
・『勧戒図説』の研究　岡　正健
・『金瓶梅』と纏足描写について　髙田　真吏

・太平天国に関する歌謡の研究　朝霧　健太
・魯迅『中国小説史略』研究
　—塩谷温『支那文学概論講話』との関係　天野　陽香

第241回　11月30日

［卒業論文中間発表］

・『捜神記』研究—「鬼」を中心に—　吉本　穂波
・容与堂本『水滸伝』における宋江評について　北村　紘大
・『勧戒図説』の内容について　岡　正健
・『金瓶梅』における纏足描写からみる人物像
　—潘金蓮を中心として—　髙田　真吏
・太平天国に関する民謡　朝霧　健太
・『中国小説史大略』と『支那文学概論講話』の比較
　天野　陽香

第242回　12月21日

［修士論文中間発表］

・元稹詩研究—「心」の表現を中心に—　蔡　若琪
・李賀詩研究—「光」の表現について—　林　書卉
・『太平広記』神部の説話内容について
　—神七から神二十三を中心に—　董　芸星
・『閑情偶寄』の「頤養部」に見る李漁の養生観　李　心怡

刊行物

『中国学研究論集』第41号（10月）

（川島　優子　記）

◉中国中世文学会

令和五年度研究大会　10月28日　於広島大学

・書美の誕生
　—張芝「忽忽不暇草書」の深層へ—　楊　春雨
・何遜「南苑」詩について　小川　恒男
・川合仲象『本朝小説』の書名について
　—「小説」を中心として—　劉　佳佳

［講演］

・日本古抄本所引白居易詩文新証　文　艶蓉
・日本唐詩學資源的開發空間及其現代意義　査　清華

刊行物

『中国中世文学研究』第76号（３月）

（川島　優子　記）

◉山口中国学会

例会　７月１日　於山口大学人文学部

・漢代の『尚書』に関わる経書説について　伊藤　裕水
・エンタメとしての恐怖がなぜ可能なのか—ホラーゲーム『港詭実録』における「紅衣悪霊」のあり方に関する一考察
　于　嘯

大会　12月16日　於山口大学人文学部

・鄒平伏生墓について　伊藤　裕水
・中国の音律論から再考する文化人類学的フィール
　小林　宏至
・漢代経学の特徴　南部　英彦

（根ヶ山　徹　記）

◉中国四国地区中国学会

第68回大会　６月10日　於徳島大学

・敦煌本『論語疏』再考
　—旧鈔本『論語義疏』との比較を中心に—　吉岡　佑馬
・川合仲象『本朝小説』における引用の分析
　—『唐詩選』を中心として—　劉　佳佳
・江戸時代の『荘子』研究について　藤居　岳人
・「朱子」とは何か　溝本　章治

（大村　和人　記）

◉九州中国学会

第71回大会　５月13日　オンライン開催

・知覚トレーニングに基づく中国語発音教材の開発—音声産出における効果の検証—　劉　驫、董　玉婷
・中国語初級段階における文法学習の意義
　—品詞と文成分の知識—　山口　直人
・類書『白氏六帖』による白居易「百道判」の本文批判
　大渕　貴之
・「夢」と「物化」
　—「胡蝶の夢」説話に関する新考察—　楢崎洋一郎
・聶双江の帰寂思想再考　伊香賀　隆
・王鐸の臨書に内在する法帖への懐疑思考について
　大野　紘暉

・方紀生の新資料に関する一考察—周作人宛書簡から窺う日本占領期における中国文壇のダイナミズム　鳥谷まゆみ
・近代中国における“童話”の誕生
—周作人、「児童観」そして日本をめぐって　汪　憶霏
・植民地文学としての台湾シュルレアリスム—楊熾昌「炎える頭髪“詩の祭禮”のために」について　頼　怡真

刊行物

『九州中国学会報』第61巻（５月）

（藤井　倫明　記）

◉九州大学中国文学会

第322回中国文藝座談会　１月28日　ハイブリッド開催

・漢代の災異文化と漢楽府鼓吹鐃歌『上邪』の解釈　潘　堯

第323回中国文藝座談会　３月４日　ハイブリッド開催

・杜甫の詩にあらわれる鳥　大石　柊汰
・袁枚詩における歴史故事　張　茜

第324回中国文藝座談会　４月29日　ハイブリッド開催

・『甌北集』における連作の五言古詩について　汪　洋
・〈舊枕故衾誰與共〉本文の伝播と消滅　静永　健

第325回中国文藝座談会　７月15日　ハイブリッド開催

・趙翼の「汪文端公挽詩一千字」　汪　洋
・吃音と文学創作の関わり　栗山　雅央
・『新編水滸画伝』の使用語彙から見た曲亭馬琴の白話学習　孫　琳浄

第326回中国文藝座談会　９月16日 ハイブリッド開催

・古代日本における西王母伝説の受容の一考察　ウィリアム・マツダ
・唐汝詢『唐詩解』の出版過程とその選詩基準　陳　イ璇
・陳鐸の曲に就いて　井口　千雪
・清華大学教授劉文典の来日経緯　稲森　雅子

第327回中国文藝座談会　11月25日 ハイブリッド開催

・周作人と日本文人たちの交流　呉　紅華
・杜甫詩における女性と日暮　李　岳陽
・帰有光史記評点の公開と出版　樊　致遠
・身份·修辞·场景的错乱与统一　徐　樑

刊行物

『中国文学論集』第52号（12月）

（井口　千雪　記）

各種委員会報告

【論文審査委員会】

委員長　小松　謙

〇学会報第76集応募論文の審査の経緯

・2024年１月15日（消印有効）締め切りの応募論文は全46篇（哲学・思想部門11篇、文学・語学部門26篇、日本漢学部門８篇、歴史部門２篇〔ただしうち１篇は哲学・思想部門とあわせての審査を希望しているため、同部門11篇に含まれる〕）であったが、うち１篇が枚数超過・形式不備のため不受理となった。１月28日に東京大学において第２回委員会を開催し、残る45篇の論文に関して、１篇につき２名の査読委員と、論文審査委員会委員の中から１名の閲読委員を決定した。

・３月24日に東京大学で開催した第３回委員会において、査読委員２名・閲読委員１名の査読結果をもとに、哲学・思想部門３篇、文学・語学部門９篇、日本漢学部門３篇、歴史部門１篇の計16篇を修正の上掲載する方向性を定めた。

〇第3回委員会におけるその他の決定事項

・学会報第77集依頼論文執筆候補者（評議員２名、一般会員２名）を決定し、理事会に推薦することとした。

・哲学・思想部門１名、文学・語学部門１名、日本漢学部門１名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。

・下記の論文審査関係連絡業務の一部を電子化することの可否を理事会に諮ることとなった。

⑴　評議員への日本中国学会賞・学術振興会賞候補者推薦のお願い

⑵　査読論文に関する諸連絡

【研究推進・国際交流委員会】

委員長　三浦　秀一

一、書評シンポジウムの開催

昨年に引き続き、2024年秋開催の第76回大会においても、「パネルディスカッション」の分科会として書評シンポジウムを実施します。専門領域・所属機関・性別などについて、多様性を考慮したフレッシュなパネルを歓迎します。下記の募集要項をご参照のうえ、ふるってご応募ください。

記

１．構成・形態：著者１名、評者３名程度、司会者１名によるパネル型書評会。

２．時間：報告や質疑応答等を含め、全体で120分以内。

３．締切:「研究発表の募集」（「学会便り」本号裏表紙所掲）の「３．締切」と同じです。

４．応募方法：パネルの代表者（もしくは連絡担当者）が、パネリスト全員の氏名（フリガナ、所属機関および職位、メールアドレスも明記のこと）、および書評の対象とする学術書のタイトルとその「概要」（800字以内、日本語による。目次も附記する）を、「研究発表の募集」の「４．応募方法」と同様の方法により、大会準備会宛て送付してください。

５．応募資格：著者と司会者、および評者２名は本学会の会員資格を有していることを条件とします。書評の対象とする著作は、著者にとってデビュー作に相当する学術書で、2020年～ 2022年に刊行されたもの。評者の年齢は、あくまでも原則ですが、当該学術書の著者と同年齢もしくはそれ以下とします。

６．応募宛先:「研究発表の募集」の「６．応募宛先」と同じです。

７．問い合わせ先：学会事務局（info@nippon-chugoku-gakkai.org）

二、評者報告の学会 HP 掲載

2023年度学会大会（第75回）の書評シンポジウムに登壇された評者各位による報告の文章を、学会 HP の『研究集録』に掲載しました。是非ご一読ください。

【将来計画特別委員会】

委員長　弛　和順

〇2023年度大会アンケート結果報告

第75回大会は、2023年10月７日・８日、大阪大学を会場とし、対面にて開催されました。同月半ばから翌年２月末日まで、本学会ホームページにて、「2023年度大会アンケート」を行ったところ、175名から回答を得ました（昨年は198名、一昨年は118名）。全回答のうち、大会参加者は120名（68.6％）、不参加者は55名（31.4％）でした。回答に協力くださった会員には、心より感謝申し上げます。

ここでは、以下、Ⅰ～Ⅵの六項目に分けて、結果の概要を報告します。なお、詳細については、後日、本学会ホームページに掲載する予定です。

Ⅰ．参加プログラムについて

120件の回答のうち、「研究発表（10月７日）」が109名（90.8％）、「研究発表（10月８日）」が81名（67.5％）、「書評シンポジウム（10月７日）」が35名（29.2％）、「書評シンポジウム（10月８日）」が38名（31.7％）、「総会」が39名（32.5％）、「書店・出版社展示」が84名（70％）であった。

Ⅱ．大会の実施方法について

◇大会の実施方法について

「よかった」が51名（42.5％）、「大変よかった」が44名（36.7％）、「どちらともいえない」が17名（14.2％）であった。

自由記述では、「久々の対面による大会で、会場に活気があり、とてもよかった」「対面式での懇親会もあり、学術研究情報の交換ができた」「会場内での教室移動が容易で助かった」「企画から運営まで、とてもよかった」など、対面での開催を中心に、肯定的な意見が多く寄せられた。一方で、「発表資料が足りないことがしばしばあった」「資料なしで発表を聴く人がないように、発表資料は数日前にアップロードするのがよいと思う」「教室が少し狭かった」「聞きたい発表が同時間帯に重なった。もう少し発表を絞り込んでもよかった」「研究発表とシンポジウムはオンラインでも聴講できる方がよい」など、一部改善を求める意見もあった。

◇研究発表・質疑応答の時間（25分間）について

「適当である」が90名（75.6％）、「短すぎる」が29名（24.4％）であった。

◇司会のコメント及び質疑応答の方法について

「よかった」が46名（38.3％）と最も多く、「大変よかった」が39名（32.5％）と続いた。自由記述では「質疑応答の時間が短く、議論が盛り上がりつつあるところで時間切れになったのは、少し残念に思う」「フロア参加者からの質疑がやや少ないと思う」などの意見があった。

◇発表と発表の間の休憩時間（5分間）について

「適当である」が88名（73.3％）と最も多く、「短すぎる」が30名（25％）と続いた。

◇総会について

「大変よかった」が15名（33.3％）と最も多く、「よかった」が14名（31.1％）と続いた。

Ⅲ．大会全般について

「アンケートの実施は良い。今後は各発表についての評価も実現してほしい」などの意見があった。

Ⅳ．書評シンポジウムの実施について

「多角的な視点から意見交換がなされ、若い研究者が広い視野をもって研究に取り組もうとするよい刺激になると思った」「発表者の発表、コメント共に興味深く、大変勉強になった」など、肯定的な意見が多かったが、一方で「当該の書物を読まなければならないという制約があるので、参加者が自ずと限定されるのではないか」「特定の書物のみ学会で取り上げることは、公平性に欠ける」といった意見があった。さらに「質疑応答の時間をもっ

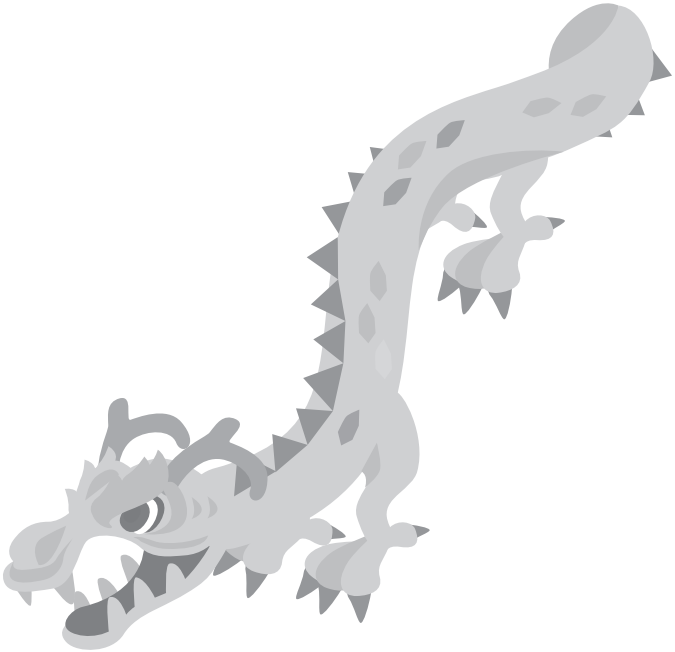
ととり、会場のやりとりを増やすとよい」という提案や「当該書籍を入手して読むため、早めに内容を知らせてほしい」という要望があった。

Ⅴ．託児所の設置について

「育児中の研究者の研究機会確保のため、是非とも続けてほしい」「過去に利用した。大変ありがたかった」「たとえ利用者が無くても設置していただきたい」など、すべて肯定的な回答が寄せられた。

Ⅵ．日本中国学会全般について

「完璧な質などは求めないで、大会はオンラインと併用にしてほしい」「様々な事情で参加できない人のために、ハイブリット方式の開催を希望する」「評議員会はオンラインでも参加できるようにした方がよい」「デジタル化をより強力に推進してほしい」「『日本中国学会報』のデータ化、Web 公開を進めてほしい」など、大会等開催のハイブリット化や刊行物等のデジタル化に関する意見が少なくなかった。



事務局より

◎評議員の一部交代について

2024年３月31日に評議員１名が評議員定年を迎えたため、下記のとおり2022年に実施された評議員選挙の結果に基づき１名の会員が繰り上げ当選となりました（任期は2024年４月１日から2025年３月31日まで）。

・退任の評議員
　佐竹保子会員
・後任の評議員
　鶴成久章会員

◎出版委員会委員の退任と追加について

吾妻重二会員が2024年３月31日付で出版委員会を退任することとなりました。また、鶴成久章会員を同年４月１日付で同委員会委員に委嘱することとなりました（任期は2024年４月１日から2026年３月31日まで）。

◎特別寄付金会計寄付者（20万円以上、歴代）

2021年度：加地伸行会員（300万円）

◎住所等の変更と会員名簿への掲載について

住所や所属機関等の変更につきましては、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。郵便、ファックス、あるいは会費納入時の振込用紙（ゆうちょ銀行払込取扱票）通信欄でも受け付けてはおりますが、なるべく電子メールをご利用くださいますようお願いいたします。

今年度10月発行の会員名簿には、７月末日までにお知らせいただいた会員情報を掲載いたします。それ以降の変更については次年度の掲載となりますので、ご了承ください。なお、以前は固定電話の番号（自宅または勤務先）のみを掲載しておりましたが、2013年度から携帯電話の番号も掲載できることといたしました。携帯番号を掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います（ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を掲載することはありません）。

◎クレジットカードによる会費決済について

海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を開始しています。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページの URL をお送りいたします。なお、利用可能ブランドは VISA・MASTER のみです。ご了承ください。

メールアドレス登録のお願い

日本中国学会では、会員のみなさまのメールアドレス登録をお願いしています。まだご登録頂いていない方はホームページの「メールアドレス登録（会員専用）」（URL：http://nippon-chugoku-gakkai.org/?p=2274）よりご登録をお願いいたします。

パスワードは sinology1234です。メールアドレスの変更も、上記の登録フォームから可能になりました。

登録フォームにアクセスできなかった場合は、事務局（info@nippon-chugoku-gakkai.org）宛に、メールアドレスをお知らせください。

日本中国学会事務局
電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org
郵　　便：〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内
ファックス：03-3251-4853
ゆうちょ銀行振替口座
口座番号：00160-9-89927
加入者名：日本中国学会

第76回大会開催のお知らせと研究発表の募集

会員各位：

陽春の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第76回大会は二松学舎大学が準備を担当し、本年10月12日（土）、13日（日）の両日、二松学舎大学九段キャンパスにて開催することとなりました。つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募くださいますようお願い申し上げます。

2024年４月吉日
日本中国学会第76回大会準備委員会
牧角　悦子

記

１．部　　会　：　一、哲学・思想
二、文学・語学
三、日本漢文（日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など）
四、歴史
五、パネルディスカッション
Ⅰ次世代シンポジウム
Ⅱ書評シンポジウム（応募方法等の詳細は『學會便り』本号20ページをご覧ください）

２．時　　間　：　一〜四は発表20分に質疑応答10分、五は報告、質疑応答含め全体で120分以内。

３．締　　切　：　2024年６月24日（月）（当日消印有効。簡易書留、レターパック、EMS 等追跡調査が可能な郵送手段でお願いします）

４．応募方法　：　研究方法は、学術研究の最新の成果で、未発表かつ未公刊のものに限ります。一〜四に応募される方は、氏名（フリガナ・所属研究機関および職位）・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、発表題目および概要（800字以内、日本語による）を、大会準備委員会まで郵送すると同時に、それらの Word ファイル（.doc または .docx 形式）を E-mail（ファイル添付）により期日までに送付してください。E-mail 受信時には自動返信します。期日（日本時間）までに電子ファイルが届いていない場合、応募は受理できませんのでご注意ください。
五に応募される場合は、パネルの代表者がパネリスト全員の氏名（フリガナ、所属研究機関および職位、メールアドレスも明記のこと）、パネルの題目と概要（1,200字以内、日本語による）を、上記と同様の方法により、大会準備会宛てに送付してください。なお、学会、研究会あるいは研究機関（研究室等）によって組織されたパネルも可とします。
※応募時の日本語概要をもとに審査を行い、採択結果を通知します。なお、執筆者による校正はないため、完全原稿でお願いします。

５．応募資格　：　研究発表の応募には、本学会会員資格が必要です、五のⅠ「次世代シンポジウム」については、パネリスト全員の本学会会員資格が必要となります。新入会員の方は、応募申し込み締切日（６月24日）までに会費の振り込みが必要となりますのでご注意ください。

６．応募宛先・問い合わせ先：　〒102-8336　東京都千代田区三番町6-16　二松学舎大学文学部中国文学科
牧角悦子研究室（日本中国学会第76回大会準備会事務局）
E-mail：japansinology76@gmail.com

◎本年は、一、哲学・思想　二、文学・語学　三、日本漢文　四、歴史　五、パネルディスカッションの五部会を予定しておりますが、応募状況により調整することも考えております。各部会の発表は、質疑応答も含めて日本語でお願いします。なお、バランスも勘案して審査を行ない、やむを得ずご発表をお断りすることもありますのでご了承ください。
◎パネルディスカッションに年齢制限はありませんが、次世代を担う若手研究者からの応募を歓迎します。またパネルの内容は、学会ホームページに「研究集録」として掲載される予定です。
◎大会で発表を行う常勤職を持たない会員が宿泊費を必要とされる場合は、補助金１万円を支給いたします。
◎学会ホームページを随時ご覧ください。

以上